



# ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 87

～数千年 超えて今なお 書の魅力～

<http://pianomed-mr.jp/>

私は以前から「漢字」が大好きだ。たとえば、四字熟語、漢文、漢字の成り立ち、美しい書体などに興味をそられる。

先生方にしばしば漢字の魅力を伝授してきた。アルファベットを使う人々の人々は、漢字という意味を有する表意文字が面白いようだ。名前を漢字で書くとともに喜んでくれる。

このように、漢字やひらがなを示すだけで、いろんな文化的・教育的交流となる。単に文字だが、国際理解と友好の発展に、少なからずプラスになっているような気がしている。

ちょうど今、日中国交正常化40周年、および東京国立博物館140周年記念として、特別展「書聖王羲之」が開催中だ(図1)。その中からエピソードを若干紹介し、書の道や音楽の道について、触れたいと思う。

## 漢字の誕生

今から約三千年前、最も

外国出張のとき、各国の先生方にしばしば漢字の魅力を伝授してきた。アルファベットを使う人々の人々は、漢字を人や組織との「契約」に用いて、漢字を共有する文化圏が形成されていった。



図1



図2

古い漢字が誕生した。「殷

で発明された甲骨文字である。その目的は、甲羅に文字を刻み、骨のひび割れの具合によって天候や戦争などを占うこと。つまり、神との対話や契約のために、使われていた(図2)。

その後、「殷」と争って勝つた「周」は、漢字を違う目的で活用していく。部族

その後、漢字の存在価値が大きく変わる事態となることに。ときは4世紀、東晋の時代に歴史的な人物が出現したのだ。

王羲之(303~361、諸説あり)は文字に対する認識を根底から覆した。單なる意思を伝えるものではなく、従来の書法を飛躍的に変革。つまり、書道という芸術まで高めたのである(図3)。

王羲之は草書や楷書を学んで昇華させ、新しい書風を創出した。瀟洒な美しさや爽やかさの上に、先進的な造形と高い響きが盛り込まれたものであつた。

この革新的な作風が、時の権力者に高く評価されることに。特に、唐の太宗は「善を尽くし美を尽くした」と絶賛するほど、普遍的な



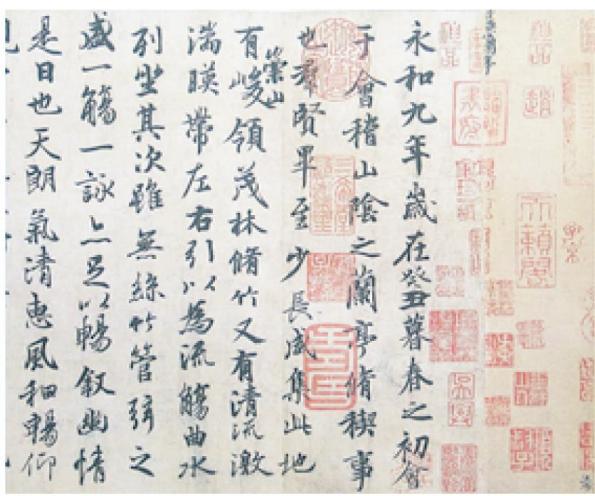
Tokushima Economy Journal 24

美しさを先取りしたもので

いろいろなエピソードの中で、蘭亭における雅宴が広く知られている。その際に、最高傑作の作品とされ、「蘭亭序」<sup>らんていじょ</sup>が生まれたからである（図4）。

臨本と摸本

さて、王羲之は「書聖」とされ、歴代の皇帝が愛し高く評価されてきた。それでは、その直筆があるのだろうか？



四

あるが、氣脈は貫通し、筆づかいも自然である。

図 6

次第に消滅してしまつたと  
される。

一方、(2)は、黒い文字の輪郭を丁寧になぞるため、墨の微細な擦れや濃淡の再現は難しかつたと私は推測する。ただし、現代ではコンピュータやスキャンを駆使できるため、今後は(2)の適応が増えていくのではないだろうか。

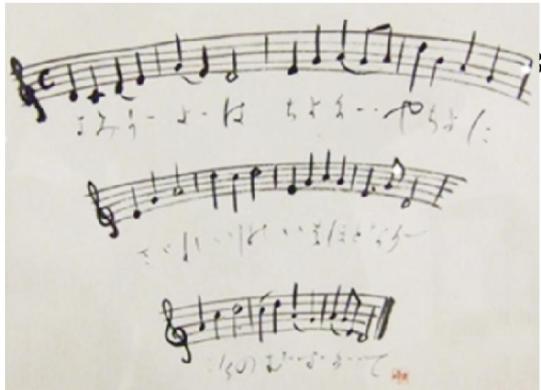
## 書道と音楽

帝溥儀が記した七言の対句  
が残されている(図5)。

四七〇

ジョンが誕生した。図

17



8

「書道で伝える書の力」  
とは、自分の心を言葉で表  
し、目で見えるように現し  
表現し人にも伝えることで  
はないだろうか。

書の世界は、当初は中國で漢字の記載から始まつた日本では、平安時代の日本三筆（嵯峨天皇、空海、橘逸勢）や日本三蹟（藤原行成など）などが発展させ、日本の書は魅力的だ。ひらがなの書体も優しく、とても美しい（図6）。

近頃は、書にもいろいろな展開がみられる。たとえば、芸術の分野で、旧来の要素が融合する場合も。たとえば、音楽の分野で数種の音楽が混じり合いフューチ

（板東浩、ばんどうひろし、  
医学博士、糖尿病専門医、  
ピアニスト）

筆者はピアノを練習しながら、書についても素人のレベルながら楽しんでいる（図8）。字の優劣という技術ではなく、自分の信条を表すのが大切だろう。

もともと、墨で字を書く  
筆は「聿」<sup>ふで</sup>だった。その後、

夢があるから  
頑張る

**25** Tokushima Economy Journal